冬の北海道の恵山に登る

蛭川隆夫

●恵山豆知識

北海道は、頭を東に向けた魚のエイの形にたとえられる。エイの尻尾にあたる部分を渡島半島（おしまはんとう）と呼ぶが、渡島半島の南半は東西に分岐し、西側を松前半島、東側を亀田半島と称する（半島の中にまた半島があるとはおもしろい）。両半島の分岐点に函館の市街地がある。恵山（えさん）は、そこから約 50 km 離れた亀田半島の突端に位置する、標高 618.1 m の活火山（一帯の火山活動は約５万年前に始まったが、恵山は約８千年前の噴火でできた若い溶岩ドーム）。「えさん」は、アイヌ語起源の諸説があるなかで、「エ（頭）、サン（浜の方に出ている）、ニ（所）」、すなわち山ではなく岬というのが有力らしい。ここからは素人の想像だが、道南に渡ってきた和人が「サン」の音に引きずられて、「エ」に「恵」、「サン」に「山」という漢字をそれぞれ当てて、岬名を山名に転化させたのではないだろうか。恵山は、その数 60 万本とも言われるツツジの名所である（サラサドウダンツツジ、エゾヤマツツジ、エゾイソツツジなど）。

●ひさしぶりに「高橋」のビブラム靴

この旅は、小野さんが見つけた格安ツアーに古田さんと私が乗ったもの。札幌～函館（250 km）の往復バス代＋ホテル２泊のルーム・チャージで、なんと１万円ぽっきり！バスは昔ながらの一列４人掛けの観光バスで、トイレはないし添乗員もいない。食事も付かないが、函館でも上位にランクされるホテルに泊まれる。旅行業者・バス会社・ホテルは、１万円をどうやって分けあうのであろうか。

2012 年 12 月 10 日。薄暗いうちに起きて函館駅に近いホテルの窓から外を見おろすと、さかんに雪が降っている。万全を期して、厚手のゴアテックス雨具（ズボン）を履き、ダウン・ジャケットを着込み、ロング・スパッツ、８本爪のアイゼン、目出帽、ゴーグル、オーバー手袋を忘れずにザックに入れた。

足拵えは、「高橋」のオール・シーズン（ただし高所での厳冬期を除く）のビブラム靴。2003 年 4 月の三月会記録に、山本健一郎さんが「（蛭川は）高橋にオーダーした靴が完成、馴らしに（奥多摩の）雷電山に行った」と書いた。しかし、この名靴は、重くて頑丈すぎて、くやしいが自分には履きこなせなかった。雷電山の直後に椎間板ヘルニアを発症したこと、この靴で長時間歩くと外反母趾がひどく痛むことから、軽登山靴を多用してきたのだ。

ずっと敬遠してきた「高橋」だが、今回思いきって何年ぶりかで取りだし、入念に保革油を擦りこみ、フィットする靴下をあれこれ吟味した。静内山岳会の大晦日のアポイ岳ご来光登山に備えて「高橋」の試し履きをしておく必要もあったからだ（これはその後の大雪で中止となった）。

試しと言えば、今回は、ダブル・ストックを初めて使う。11 月の小野プロジェクト（夕日岳＆朝日岳）で、標高差わずか 300 m の下りで左膝に激痛が走り、迷惑をかけてしまった。藪道・細道・急道ではシングル・ストックの方が扱いやすいと考えてきたが、ダブルにして膝への負荷を軽減しようというのである。

はたして、靴 1.2 kg＋アイゼン 0.4 kg（いずれも片足）の負荷に耐えられるだろうか。外反母趾は痛まないだろうか。膝はだいじょうぶだろうか。

●恵山へと走る

7時。身支度をととのえた小野・古田・蛭川は、内城ミヱ子さん（道岳連理事）の迎えの車に乗り込んだ。我々3人と内城さんだけの山行と思っていたが、R278の途中で道南の山好きが合流して、メンバーは総計11名となった。内城さんは、8月に一緒に鳥海山＆出羽三山を登った古田さんの知人であるが、道内外はおろか海外の山にも毎年のように登っているらしい。来年の2月にキナバル山を計画していると言ったら、ハンドルを握りながらアドバイスをしてくれた。「最高所のサヤッ・サヤッ避難小屋を過ぎた花崗岩の大斜面でピークがいかにも近いように見えてくるが、そこでもうすぐとばかり急ぎ足にならないことが大切ですよ」などと。

車は、汐首岬（しおくびみさき）を通過。ここは、津軽海峡をはさんだ北海道と本州の最短地点。工事再開した大間原発とは17.5 kmしか離れていない。岬を大きく回りこむと、恵山が近づいた。山肌が白く見えたが、雪の白さなのか爆裂火口の礫の白さなのか判然としない。

日ノ浜（ひのはま）まで来ると、恵山は見上げるようになる。ここの縄文遺跡で、イノシシの幼獣の特徴（縞状の紋様）を表した、小型の土製品が出土しているのを思い出した。

←イノシシ型土製品（北海道教育委員会「北の遺跡案内」ＨＰより）

北海道には昔からイノシシが棲息しないのになぜこんな遺物が出るのであろうかなどと考えているうちに、車は左折して津軽海峡から離れ、峠越えとなった。北の方向へと恵山西側の山裾をおおよそ半周すると、噴火湾に面した旧・椴法華村に出る。ここで国道と分かれて、今度は海岸沿いの道道を四分の一周ほど南下した。駐車スペースのない「椴法華コース」登山口は通過して、亀田半島の東端にある「ホテル恵風」の駐車場に至った。恵山の火山らしい岩壁が屹立しているが頂上は見えない。

●恵山に登る

全員で簡単に自己紹介をして、10:00少し前に出発（時間は小野さんの記録を参考にした。以下同じ)。トップでラッセルをするのは、岩田弘志さん。「函館マウンテンクラブ」の会長である（(内城さんは同クラブの事務局長)。今回の山行は、古田さんが内城さんにお願いし、それを内城さんが快諾してくださって実現したもの。北海道移住後に恵山に登りたいと願っていた私にとって、うれしい企画である。

最初は広葉樹林の遊歩道だが、所々凍結している。アイゼンなしでも注意して歩けば問題はないと判断した。しばらくして「椴法華コース」（林道）にぶつかる。この林道を少し進むと「十三曲がりコース」の看板が立っている。ここからがつづら折りの本格的な登山道。樹木もサラサドウダンが多くなってくる。後ろの方で「この辺、ツツジの開花のころ、それは素晴らしいわよ」という女性の声が聞こえた。

樹高が低くなってくると、傾斜もゆるみ、展望が開けてきた（11:00)。正面に火口原が拡がり、その奥には賽の河

原駐車場が望める（無雪期はそこまで車で来られる）。小さく見える建物は、噴火のときの緊急避難所とのこと。火口原の左側には草木のない恵山の岩肌が盛り上がり、右側には外輪山が延びその先に海向山（かいこうざん）。しかし、津軽海峡や噴火湾はぼんやりとしか見えなかった。対岸の下北半島や室蘭方面に至っては、完全に雪雲の中であった。

これまでとは一転して冷たい西風の中、ジャケットのフードを上げて少し行くと、頂上への分岐点。見上げると、恵山西面の爆裂火口から噴気が上がり、それが東面の登山道に吹きつけている。「私が倒れたら、皆さんはすぐバックしてください」と岩田さんが冗談めかして言った。

火山礫の間にジグザグの登山道が整備されている。そこを、日陰の凍結や吹きだまりに気をつけながら登った。ときどき硫黄臭のガスに襲われ、むせている人もいた。

12 時に頂上に到着。頂上といっても広い、ほぼ平らな台地だ。一番高い一角に頂上標識があり、そこで記念撮影。残念ながらここでも遠望は得られなかった。晴天なら日高山脈も見られるのだそうだ。台地を南に歩いてゆくと、立派な鳥居を持つ権現堂がある。大漁と安全を願って地元漁師が建立したとのことだが、なんだか本州の山に来たような感じがした。古田さんが、お賽銭を投げて何事か祈っていた。「蛭川さんのキナバル登山の安全をお願いしたんだよ」と言う。冗談でもうれしい。

風を避けて昼食を取ってから下山開始（12:30）。せっかく安全を祈ってもらってもここでスリップ、骨折でもしたら大変と、アイゼンを装着。そのおかげか、なにごともなく往路を駐車場まで下った（14:20）。なんとか「高橋」の重みに耐え、左膝も軽い違和感ですんだ。ダブル・ストックの効用も確認できた。ただ、外反母趾の痛みは相変わらずであった。

ホテルまで送ってもらって、内城さんとお別れした。内城さん、ほんとうにありがとうございました。

●とどのつまり（椴法華とは）

下山の途中で、椴法華コースへの分岐で小休止していたときのこと。椴法華の読み方を尋ねたら、岩田さんが「とどほっけ」と答えて、笑いながら「トドはホッケが好物」と言った。冗談の通じないＡ型人間の自分が「獣偏でなく木偏の漢字を海獣に対して使うのは不思議ですね」と聞いたら、「椴はトドマツのトドですよ」とのこと。小野さんも「遊歩道のトドマツのプレートにたしかに漢字で椴松とあった」と教えてくれた。椴がトドマツなら、木偏も納得できた。

帰宅して中日辞典を見たら、「椴」の日本語訳として「ムクゲ」や「シナノキ」や「ハコヤナギ」はあるが「トドマツ」はない。別の辞典ではこれらに加えて「トドマツ」があることはあったが、国訓と注記付きである。これは、漢字の原義を離れて日本語独自の読みをするものだ（中国でナマズを表す「鮎」を日本語で勝手に「アユ」と読むのと同じ）。それでは、木偏だけでも沢山ある漢字の中で、なぜトドマツに「椴」を当てたのか。北海道森林管理局のＨＰでは、トドマツの枝は毎年一段ずつ輪生するので旁が段の「椴」を選んだと説明している。どんな選者か、会ってみたいも

のだ。また、「椴松」という熟語の形でなら日本語訳「トドマツ」があったが、これは日本語の椴松からの逆輸入であろう。なぜなら、トドマツは、ある図鑑に「北海道、南千島、サハリン」とあるように分布が限定的で、中国には自生しないからだ。

今度は「トド」の語源を調べるために国語辞典を引いた。まずトドマツの「トド」は、見出し語にない。あるのは、海獣のトドと魚のトド。トドという魚がいるとは知らなかったが、ある出世魚の最後の段階を指すらしい（トドの前の段階はボラ)。「とどのつまり」とは、これ以上は大きくならないという意味だと解説されている。ああ、それにしても海獣と海魚と植物がなぜ同じ「トド」なんだ！

椴法華の「とどほっけ」に戻ると、「とど」は海獣でも海魚でも植物でもない。「ほっけ」も海魚のホッケではない。アイヌ語地名の権威（山田秀三）の説明では、アイヌ語の「トゥー（山の走り根の)、ポㇰ（下の)、ケ（所)」。現実の椴法華村は、地図で見てもいかにも「山の走り根の下にある土地」という地形だ。このトゥーポㇰケを和人が「とどほっけ」と聞きとり、椴法華と漢字を当てたのだろう。

ホームページ幹事から山行記を依頼されたのに、ついアイヌ語地名へと脱線してしまいました。北海道の山名や地名は、たとえ漢字で表記されていても、その多くがアイヌ語起源です。北海道の山歩き（旅行）では、山名（地名）のアイヌ語の語源や由来を探るのも楽しみの一つです。